客船よもやまばなし

〈連載(293)〉

伊豆諸島航路最初のカーフェリー「フェリーあぜりあ」に乗る

大阪府立大学21世紀科学研究機構
特認教授　池　田　良　穂

4月13〜15日に東京ビックサイトで開催された国際海事展シージャパンに初めて出席した。4月のこの時期は、大学では入学後そして新学期開始にあたっての様々な行事があり、とても現役時代には大学を空けることができなかったが、研究だけに特化した現在のポストになってようやく可能になった。14日には、海事プレス社主催の国際会議があり、これが最も楽しみであった。この会議では、海運、造船関連の経営者が次々に登壇して、示唆に富む話を聞くことができた。

なかでも嬉しかったのが、パネルディスカッションにおいて三菱重工の大倉副ドメイン長が、クルーズ客船の建造もこれからも続け、さらにその建造効率を高めるためにRoPax(日本での旅客カーフェリー)の建造にも手を広げると高らかに宣言したこと。欧州の事例でもわかるように、客船の建造は連続建造することによってはじめて利益がでる。このためにはクルーズ客船だけでなく、類似船種であるクルーズフェリーやRoPaxをミックスして建造することは極めて賢明な選択だと思う。不幸にしてアイーダ向けのクルーズ客船の建造では巨額の赤字を出したが、それが将来につながることを心から願いたい。

もうひとつの収穫は、海運および造船企業の首脳陣がその発言の中で、「自動運航船開発の必要性」に言及したことだ。前回の本コラムで、筆者らのグループが、日本無線と今治造船と共同で、自動運航船に関する研究開発プロジェクトを発足したことを報告した。この分野では、欧州が一歩先をいっているが、ようやく日本国内でも様々な研究プロジェクトが発足しそうだ。多彩な視点からの研究開発になると思われるが、切磋琢磨して実用化にまでつながれば、日本の海事産業にとっての大きな前進となるに違いない。

さて、Sea Japanに出席してから、その週末の神新汽船の「フェリーあぜりあ」のワンデイクルーズに乗るために下田に向った。

周知の通り、これまで伊豆諸島航路にはカーフェリーが就航していなかった。これは各島のほんどの港には防波堤がなく、海に突き出た突堤は、直接、太平洋の荒波に

さらされている。このため海が荒れると、着岸してもランプウェイでの乗下船が難しいと考えられていたためである。そのため荷物は、船のもつクレーン(デリック型)で上下に荷役されてきた。まさに職人技のクレーン操作が、暴れる船体からの荷役を可能としていた。

そこに登場したのが、東海汽船の子会社である神新汽船が建造した「フェリーあぜりあ」である。同船には、船尾左舷にランプウェイがあり、ここから車両の積載が可能となっている。ただし、船首のブリッジの前には、従来通りの船倉もあり、従来通りの荷役も可能となっている。ランプウェイが使えないような状態では、ここだけに荷物を積み、船上のクレーンで荷役をすることとなる。

さて神新汽船は、下田発着で、伊豆諸島の伊豆大島以南の4つの島を回るサービスを週6日行っている。南から神津島(こうずしま)、式根島(しきねじま)、新島(にいじま)、利島(としま)があり、1航海ごとに逆順での寄港となっている。最初の寄港地までは2時間弱の航海だが、最後の島までは5時間近くかかるため、不平等感を無くする目的であろう。

さて、乗船前日に下田に着いて、港で「フェリーあぜりあ」の入港を写真に収めることができた。宿泊は、下田港の黒船遊覧船「サスケハナ」の乗り場を眼下に眺めることのできる黒船ホテルとした。

翌朝、8時半頃に神新汽船の乗り場に着くと、同船ではすでに荷役が始まっていた。ランプウェイが上がっていたので、今日は車の輸送がないのかと思ったが、すでに1台積載を終えて、後は船首の船倉への荷役とのことだった。親会社の東海汽船を通してインタビューをお願いしていたので、大野営業所長に挨拶をさせていただき、その後、同船のパーサーの石関さんとも20数年ぶりの再会をして、その案内でいよいよ乗船した。

500総トン弱の小型離島航路船だが、なかなかモダンな内装で、かつての離島航路船のイメージではない。デザイナーは、東海汽船の「橘丸」と同じ笠井さんだという。

下田港に入港する「フェリーあぜりあ」

「フェリーあぜりあ」のターミナル

インターネットで同船には、レストランも売店もないと知っていたが、ホテルから乗り場までの途中には、コンビニも見つからず、昼食用の弁当を調達できずに到着してしまっていた。しかし、船内には飲み物

とカップ麺の自動販売機があるのを見て、昼食抜きと覚悟していたものの、何とか飢えは凌げそうで安心した。その後、石関さんが弁当を島で手配しましょうかというお申出があり、船上でのまともな昼食もできることとなった。海上でこの弁当をさかなにビールを飲みながらの航海はなかなか楽しい物だった。ワンデイクルーズ客には、島製の豪華な弁当が手配できるようにしても、多少ながら島にもお金もおち、クルーズ客にとっても人気がでそうに思った。

9時半、すべての荷役を終えて、定刻に「フェリーあぜりあ」は岸壁を離れた。港のスタッフは全員総出で、岸壁で手を振って見送ってくれた。船上の子供が一生懸命手を振って、これに応えており、これが船に対するいい思い出になってくれることだろう。

この航路では、各港では10分程度の停泊時間なので、ワンデイクルーズで乗船すると島での上陸はできない。7時間のかなりマニアックな船旅だが、日本の太平洋沿岸の主要航路を横断するため大小さまざまな船に出会うことができ、また寄港する島々にもそれぞれ特徴があってなかなか楽しい。

島に着くたびにデッキから、その着岸・離岸操船の様子を見、荷役風景と岸壁に集まる島の人々の様子をみているだけで時間はあっという間に経ってしまった。中でも驚いたのは、岸壁で警察官が一緒に船の綱取りの協力をしていること。島の治安維持のために、出入港する際にはパトカーで港に来ているが、係船作業まで手伝うとは。まさに「島民と一緒に生きるお巡りさん」という姿をみたような気がした。

新島ではランプウェイから乗客が乗下船

さて、船舶技術の面では、同船には、横揺れ防止のためにアンチローリングタンクに加えて、フィンスタビライザーも設置している。そのフィンスタビライザーが、航海中にデッキ上からはっきりと見えるのに驚いた。船長の言によると、フィンスタビライザーによって横揺れは大幅に軽減され、乗客の評判は上々という。

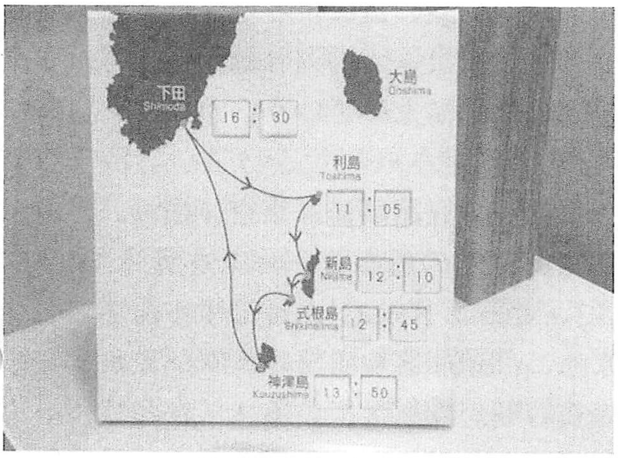
現在、伊豆諸島には東京・横浜、熱海から東海汽船の船がサービスを行っている。「フェリーあぜりあ」が寄港する前述の4島にも、高速旅客船ジェットフォイルと在来型貨客船が就航している。しかし、伊豆大島以南の4島にとっては、最も近い本州の港は下田港で、古くから在来貨客船が就航していた。「あじさい丸」、先代の「あぜりあ丸」には、筆者も乗船したことがある。しかし、その役割がジェットフォイルの就航で様変わりした。4島の島民が東京方面に行くには、以前は、東京からは在来船で長時間かけていくか、下田に渡って鉄道でいくかの選択だった。東京からの在来船では10～12時間もかかっていた。一方、下田からは直通特急(伊豆急＋JR)で東京ま

で３時間だから、４島からは６～８時間の所要時間で東京に行けることとなる。すなわち、下田航路は、もっとも短時間で、東京とを結ぶ便利な航路だった。しかし、一番遠い神津島でも、ジェットフォイルの就航に伴って、約４時間で東京まで行けるようになった。この結果もあって、下田航路は、旅客数が４万人から１万人に激減したという。

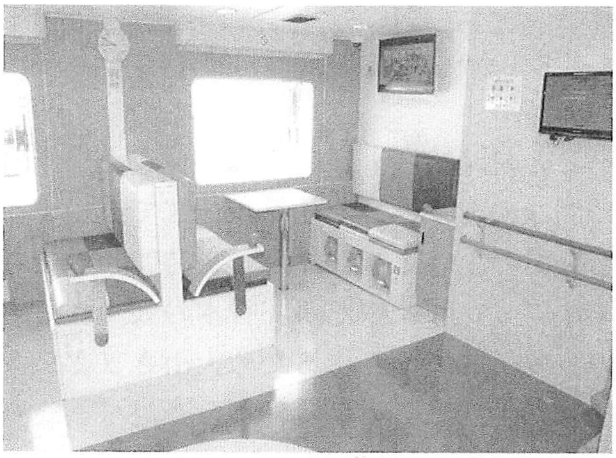
こうした時代に伴う交通機関として役割の変化に対応して建造されたのが「フェリーあぜりあ」と言える。必要のなくなった大定員の旅客施設を減らし、これまでなかった車の輸送を行うことで、新しい時代の経営の安定化を狙っているのかもしれない。

島の工事関係者や商用の車が直接乗り入れられるし、乗用車の観光客の誘致も可能となろう。荒れてランプウェイが使えなくなる日も予想されるので、車をもつ人にとっては実質的欠航のリスクもあるから、時間に余裕のあるアクティブな年金生活者が１つのターゲットになるのかもしれない。筆者も含めて、そうした年代の人々の若いころは、日本中、島ブームで、大きなリュックを背負った若者が大挙して島にでかけたものである。そんな思い出を探しに、夫婦で、愛用車で島を訪れるのも素敵なことに違いない。

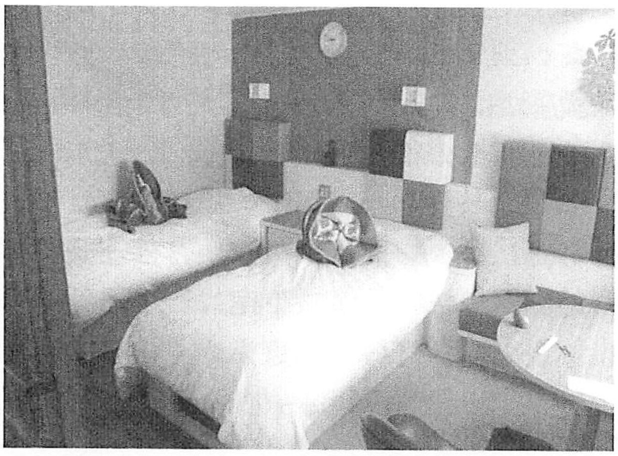
しかも車椅子でも大丈夫。同船の車両甲板にはエレベータがあり、旅客スペースには快適なバリアフリースペースも設けられている。



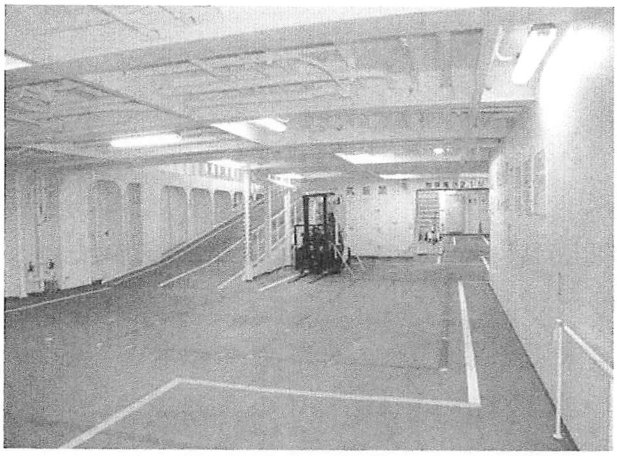
航路図と到着時間



バリアフリー室



１等室



車両甲板

5月5日発行（毎月5日発行）第516号（旧／月刊・公団船）

No. 516

月刊 共有船

鉄道・運輸機構共有
貨物船・旅客船

（一社）船舶整備共有船主協会機関誌

■ 28年度 共有建造セミナー各地で開催
◇制度の概要　◇金利制度　◇技術支援
◇SII省エネ補助金制度
◇海上交通バリアフリー施設整備助成 募集要項
◇造船関係事業資金融資制度
◇内航関係税制の概要 ◇船員計画雇用促進助成金

≪暫定事業≫
■ 28年度 建造等申請・被代替船申請要領

■ SES開発の歴史と検証㉑　499GTケミカルタンカー

■ 内航海運の活性化に向けた今後の方向性検討会開催

紹介　「第八雄豊丸」と船主・信雄海運
伊豆諸島開発の「ははじま丸」進水

◇内航海運暫定事業の収支実績と今後の資金管理計画
◇内航燃料油価格

建造／ 下ノ江造船株式会社

運航／ 田渕海運 株式会社

船主／ 有限会社 信雄海運
岡山県備前市日生町大多府153番地
TEL 0869－72－2741
FAX 0869－72－2557